アートペーパー 94
ART PAPER 名古屋市美術館ニュース 2013年冬号
Nagoya City Art Museum

特集

メキシコを愛した写真家―ティナ・モドッティ

写真家ティナ・モドッティの人と作品については、すでに本紙51号で詳しく紹介されているのだが、今回は彼女が撮影した壁画写真に関わることについて紹介したい。壁画写真は、壁画の完成当時の様子を知ることができる貴重な資料であるとともに、写真家ティナ・モドッティが撮影したという特別なものである。

1896年にイタリアに生まれ、1913年に家族と共に渡米したティナ・モドッティが、写真家エドワード・ウェストンとメキシコに渡ったのは1923年のことだ。その後の３年間、ティナはウェストンの愛人でモデルであると同時に助手でもあり、ウェストンのスタジオのマネージメントを支える公私に渡るパートナーとなっていた。その間、彼女は写真に関して彼の弟子として本格的に学んだのである。

芸術としての写真を強く意識したウェストンの作品は、物事を思いもかけない視点からクローズアップすることで、日常意識することのないような美しい形態を見せつける。写し出された物体や景色は画面にシンプルに構成され、光と影の魔法とともに幾何学的な模様や抽象的形態の美となる。それはまた機械文明の新しい時代の到来を象徴するようなモダニズム的写真と通じるものであった。初期のティナの作品はそのようなウェストンの美学の影響を多大に受けている。空に広がる電線や、並べられたグラスやバラの花がクローズアップされた、幾何学的な抽象性を含んだ形態の美しさがフォーカスされプラチナ・パラジウムプリントの優しい肌合いと相俟って詩情を含んだ華やかさを兼ね備えた美しい表現となっている。

1925年11月、ティナはウェストンや他の芸術家たちとともに初めてミネルバ宮殿で開催された展覧会に出品した。この時、ウェストンは「自分の写真と比べても全く遜色がない、彼女自身の表現になっている」[i)]と高く評価し、ティナは写真家として本格的に仕事をするようになっていく。最初はウェストンの代理としての仕事も多かったが、肖像写真を中心に次第にティナ自身への依頼も増えていった。さらに彼女の写真家としてのキャリアを決定的にしたのは、1925年に創刊された『メキシカン・フォークウェイズ』の仕事を得たことだった。この雑誌はアメリカ人研究者フランシス・ツールが企画し、隔月で英語とスペイン語のバイリンガルで発行され、内容は古いものから現代までの「メキシコの民衆の芸術」を紹介するものだ。リベラをはじめ、当時メキシコで活躍した芸術家や知識人が多く関わっていた。時にウェストンも寄稿しているが、ティナはこの雑誌の仕事を通じて、メキシコの文化と対峙し自身の表現を開花させていく。この仕事に関わったことは、ティナとウェストンがメキシコの芸術家や革命家、知識人らと親しく交流し、リベラ、オロスコ、シケイロスといった画家を中心にした新しい芸術の動きとともに自由で創造的な雰囲気の中にいたことを示してもいる。中でもリベラはウェストンの写真を高く評価し、その弟子ティナの才能を見出した人物でもあった。

ティナ・モドッティ《バラ》1924年頃

リベラはティナに壁画の記録写真の撮影を依頼し、その写真がメキシカン・フォークウェイズの1926年２－３月号に掲載された。[ii)]そこに写真撮影ティナ・モドッティというクレジットが掲載されたことが大きな宣伝となり、ほどなくして彼女は壁画の記録写真家としても売れっ子となる。このときティナが撮影した壁画は、リベラが1923年から28年にかけて文部省の壁に制作したもので、壁画が描かれている面積は1586㎡という、リベラが残した壁画の中でも最大のプロジェクトだ。この事業の開始式になされた当時の文部大臣バスコンセロスの演説がメキシコの壁画運動の公式表明であったとされる記念碑的なものでもある。1910年に始まったメキシコ革命は、それまでヨーロッパ出身の先祖をもつ現地生まれの白人、クオリーリョの上層階級が権力を持ち、それ以外の人々を搾取することで成り立っていた社会に対して、政治的な理想を持った政治家と共に、それまで抑圧されていた労働者や農民、インディオ達が立ち上がり、社会構造を根底から変革する社会革命に発展していった。この壁画のプロジェクトも革命後の新しい社会の教育制度を作り上げていく途上のことで、リベラはその中心となる文部省の建物に革命の歴史と革命後のメキシコの姿を描こうとしたのである。

ディエゴ・リベラ文部省壁画《武器の分配》1927年頃

この壁画のハイライトにあげられる「祝祭のパティオ」に描かれた最も有名な《武器の分配》には、ハンマーとつるはしをあしらった赤地の旗、青色の服を着た労働者や白色の服を着たメキシコ農民や社会主義を表す赤色のスカーフなどが描かれている。また、写実的な表現によって登場人物が実在の人物であることが分かる。絵の中心上部に描かれているのは、白いオーバーオールを着たキューバ共産党の闘士でメキシコに政治亡命していたフリオ・アントニオ・メリャ。彼はウェストンと破局を迎えたティナの恋人となり、彼女の目の前で暗殺されてしまう運命にあるのだが、その真下に描かれているのはリベラと結婚前のフリーダ・カーロ。一番右に労働者に弾帯を渡すティナ・モドッティも描かれている。他にも画面

明日を呼ぶ私の記憶

過ぎ去って気がつく ❻

美術評論家　**中村 英樹**

1976年９月から10月にかけての約一か月間、私は、アメリカの美術状況を見て回った。国務省の教育文化交流計画に基づいて招かれたためである。最初に首都ワシントンD.C.を訪れた。しかし、到着早々驚かされたのは、現地の様子にではない。９月10日付の新聞「ワシントン ポスト」を買って見たときのことだった。「毛沢東主席82歳で死去」という一面の大見出しが縦22・5㎝もある顔写真とともに目に入ったからである。その新聞は、黄色みを帯びて今も手元に残る。

ワシントンの幾つかの美術館を見てから、マルセル・デュシャンの作品などの所蔵で知られるフィラデルフィア美術館を経て、ニューヨークに着いた。そこでは、もちろん近代美術館やグッゲンハイム美術館などにも足を運んだが、リチャード・セラを始めとして数多くの現代美術家に会うことができた。ポップ・アートの中心的な存在でマリリン・モンローの既存のイメージを作品化したアンディ・ウォーホルもその一人である。

ウォーホルのスタジオでは、10人ほどのスタッフがフィルムやパネル、雑誌などの各部門に配置され、マネージャーの指示のもとでそれらの量産のために忙しく動き回っていた。ウォーホル自身は、広々としたスペースの壁面におびただしい数の作品を並べて制作中だった。スタジオのある一室に入り、その壁面を見たとき、私は、ワシントンでの出来事との偶然の一致に再び驚かされることになる。

なんと、毛沢東の巨大な画像がずらりと並んでいるではないか。少しずつ色合いは違うが、既成のイメージをベースにした同じような画面の繰り返しによって、一極集中的で強大な権力を握る中国の指導者が平均化された多数の複製品のように虚像化されていた。実在の権力者・毛沢東の死の報道と、情報化社会における毛沢東像の流布。双方に直面した私は、ベトナム戦争終結直後のアメリカで、大きな時代の流れを感じさせられた。

この年の独立200周年を祝って最上部がアメリカ国旗のように塗り分けられたエンパイア・ステート・ビルを見上げつつ、私は、次のボストンに向かった。当時、ポップ・アートは個人的な感情を排して非個性化に向かうとされたが、今思えば、ウォーホルの作品には社会批評性と死生観が色濃く漂っている。同じように既成のイメージに目を向けながら、可愛らしさなどの私的な思いに傾きがちな昨今のアートに向けて、ウォーホルは、何かを語りかけているような気がする。

ウォーホルと（1976年）

時の話題

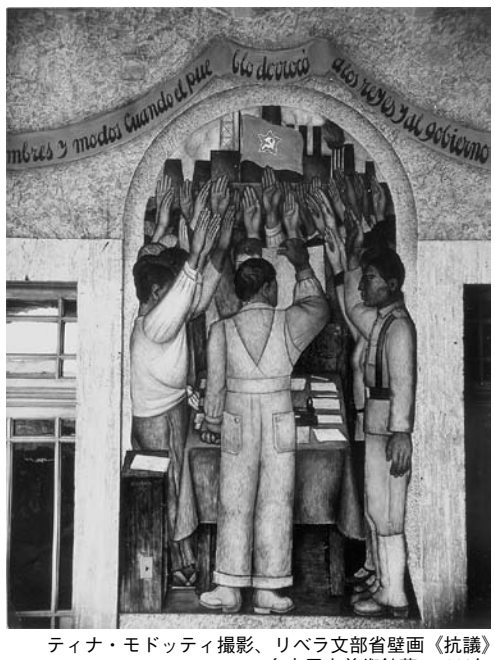
盗品?!　コレクションの難しさ

先日インターネットでニュースを読んでいたところ、東京国立博物館（以下「東博」）で展示中の朝鮮王室遺物は、韓国からの盗品の疑いあり、との記事に出くわしました。発信元は韓国のメディアで、近頃の冷え切った日韓関係を象徴するような記事の一つかと、暗い気分で目を通したのですが、嫌疑をかけられた作品は以前個人の所蔵家から東博に寄贈されたもので、その中には日本による統治時代に盗掘等の違法な手段によって入手したものが交じっている、という内容でした。東博は、寄贈を受けた作品が盗品ではないことを証明する義務があり、それができなければ韓国に返還しなければならない、と記事は結ばれていましたが、百年近く前の統治時代に入手した作品が盗品ではない、などと証明できるのでしょうか？　不正に入手した作品であるという明白な証拠が出てきたので返還せよ、というのならば理解できるのですが、不正ではないことを証明せよというのは、とてつもない難問です。ひるがえって当館の所蔵する作品について考えてみても、ある程度までの来歴を確認することはできても、100%の確かな情報を入手するなどということは土台無理な相談です。海外の作品に限らず、国内の作品についても事情はほぼ同じです。証明できないのならば返却すべしということで、当館のエコール・ド・パリやメキシコ・ルネサンスの作品についてフランスやメキシコから請求されたら、お手上げ状態と言わざるを得ません。と言って、韓国メディアの記事を単なる言いがかりと主張したいわけではありません。所蔵作品の帰属や来歴を明確にすることは、美術館にとって当たり前のことのように思われますが、厳密さを追求すると、実は途方も無く難しく、極めてデリケートな問題がそこに潜んでいるという事実が浮かび上がってくるのです。大英博物館のロゼッタ・ストーンやエルギン・マーブルの例を持ち出すまでも無く、コレクションという行為そのものに潜む危うさや、美術館・博物館という制度の正当性までもが問われる事態になりかねません。しかし、一度開いたパンドラの箱を閉めるのは容易なことではありません。今回の事態の推移を注意深く見守りたいと思います。（F）

左端の帽子を被った横顔のダヴィッド・アルファロ・シケイロス等、この絵には、リベラをとりまく人間関係が見られると同時に、インターナショナルの図像が使われ、メキシコ革命がグローバルな資本主義支配への戦いであるというリベラの解釈が示唆されている。

画面上方に文字が書かれた赤いリボンが描かれていることも、この部分の重要な特徴である。ここに書かれているのは、「コリド」と呼ばれる歌の歌詞である。コリドは中世スペインのロマンセが起源で、メキシコに伝わり土着の口承文化とあいまって大衆に広まっていった。歌われた内容は男女の恋愛物語から、社会の皮肉や風刺、民衆の英雄への賛歌など様々で、楽器の伴奏とともにその都度即興的アドリブや替え歌が生まれ、ある時はソロでまたある時は大合唱となって、マスメディアがまだ発達していない時代に出来事を伝える手段として歌い継がれていったようだ。いくつか有名なものは、メキシコ人なら誰でも知っているような大衆歌となっていたようである。リベラが書き込んだのは、幾つかのコリドをパッチワークして創作した歌詞だということだが、革命のイデオロギーをより強調する内容になっているらしい。絵の中に文字を入れることは、識字率の低いメキシコで文字が読めない人にも自国の歴史や革命の意義を伝えるという壁画の役割と矛盾するが、コリドは国民に馴染みの深いものであったようだから、歌い始めの歌詞が当時人気を博していたコリド歌手コンチャ・ミシェルの口から出ているように描かれていることもあり、実際は文字が読めなくてもイメージが換気され理解することができたのかもしれない。また、筆記体で書かれているせいか、どこか歌のリズムやメロディを感じさせるものとなっている。

さて、ティナの写真に戻ろう。彼女は壁画の様子がよくわかるように、建物の構造も含めた壁画の全体像や絵の全体図を撮影しているが、中には絵の一部分を大きくクローズアップした詳細部分も撮影している。それらは部分図であるのだが、壁画の内容にとって意義深いショットであり、また画面の構成として十分一つの絵になっている。例えば《抗議》の全体像と詳細部を見てみると、まるで映像でズームインするような動きが感じられるほどだ。壁画家から、構図の取り方など、撮影への細かな指示も関係するだろうから、どこまでが彼女の意図だったかははっきりしないところもあるが、このように、壁画の中の物語の熱気までをも感じさせるような撮り方ができたのには、彼女が壁画の意図を心底理解していたことも関係しているだろう。ティナがリベラと親しい関係にいたというだけでなく、彼女はリベラが壁画に革命後のメキシコの姿を描こうとしていたことに心から賛同し、その理念も理解していた筈である。ティナは、貧しい生い立ちから貧富の格差に対しての憤りを感じ、父親が社会主義者だった影響もあり、ごく自然な流れで共産主義に興味を持ち、民衆のための新しい芸術、革命の芸術へと向かう雰囲気の中27年には共産党員となり自らを革命に捧げようとしていた。また、彼女をとりまく「芸術と政治」という現実の中で、自身の作品を通じてそのメキシコの現実を描写するということに強い義務感を感じるようになってもいた。



ティナ・モドッティ撮影、リベラ文部省壁画《抗議》名古屋市美術館蔵　1928年

《抗議》部分

壁画写真が掲載された次号のメキシカン・フォークウェイズでは、ティナとウェストンの展覧会評としてのリベラのエッセイが掲載されている。

「エドワード・ウェストンはアメリカの芸術家なのである。それはつまり彼の感性の中に、北の現実性と南の国の今も続く生き生きとした伝統という極端なモダニティ（近代性）を含んでいるということなのだ。それと比べると彼の弟子であるティナ・モドッティはその感性において驚くべきものをなしとげている。おそらくそれはより抽象的で、より非現実的で、むしろ知的ですらある。これはイタリア人の気質そのものとも言えるかもしれない。とにかく彼女の作品はメキシコにおいて完璧に花開き、まさに私たちの感受性にぴったりと調和するものなのである」。[iii]

ウェストンの写真のクリアさとディテールにこだわった質感や建築的な構築性と比べれば、ティナの写真はより感覚的であり、情感がこもっている。二人が同じモチーフを撮影対象に選んでいるものを見れば、その違いは明らかだ。二人ともメキシコの民族的なモチーフを多く撮影したが、例えばオリャと呼ばれる壷をモチーフにしたものでは、ウェストンはその壷の形態の美しさや色のコントラストによって画面を構成するのに対してティナは壷だけではなくその壷を使う人々をモチーフに入れる。彼女が生きるメキシコの空気を感じさせるような、人々やその人たちの持つ文化や風土も写し出すのだ。それは、ティナ自身が、リベラが指摘するようにメキシコに故郷を感じていたからかもしれない。

「メキシコで感じることとアメリカで感じることは全く違います。メキシコでは、イタリアを思い出します。だから、私はメキシコにいると、自分がメキシコ人のように感じます。でも、アメリカに居たときは自分がいつも外国人であると感じていました。」[iv]

リベラのモドッティ評が掲載された同じ号で、ティナは自身の表現としての写真を初めて誌面で発表している。それはメキシコのお祭りのフダス人形の燃焼の場面を撮影したものだったのだが、それ以降この雑誌で次々と発表される彼女の作品は、さらに共産主義のイデオロギーが色濃く反映されつつもメキシコの現実をまっすぐに見つめたものだった。イタリア人でありながら、メキシコの文化や人々を愛し、メキシコの写真家と呼ぶに相応しい仕事を残した彼女の写真は私たちを魅了し続ける。（hina）

【参考文献】
ミルドレッド・コンスタンチン『ティナ・モドッティ そのあえかなる生涯』現代企画室　1985年
加藤薫『メキシコ壁画運動ーリベラ、オロスコ、シケイロス』現代図書　2003年
加藤薫『ディエゴ・リベラの生涯と壁画』岩波書店　2011年

i）Margaret Hooks *"Tina Modotti Radical Photographer"* Da Capo Press 1993, P.90
ii）残念ながら、この号に掲載された写真について筆者は確認できていない。
iii）Diego Rivera "Edward Weston and Tina Modotti" *Mexican Folkways* 1926 April-May, P. 17
iv）Hooks, ibid. P.88

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示⑯ 解説パネル

以前この欄でキャプションについて触れたことがありました（アートペーパー89号）。最近はキャプションや解説パネルなどの文字情報に対する欲求が高く、ともすると作品そのものよりも解説の方を熱心に読む鑑賞者も少なくない、という趣旨の文章でした。近年、展覧会場の入口で出品作品の一覧と簡単な解説を付けた用紙を配布する美術館が増えましたが、これも同じ流れに沿ったものといえるでしょう。解説パネルにせよ、出品一覧にせよ、美術館側の発案で制作するようになったのか、あるいは鑑賞者側からの要求で充実していったのか、いずれが卵で鶏か分かりませんが、今やどちらも展覧会に不可欠なものになったことは間違いありません。この傾向は日本だけでなく、海外の美術館でも次第に広まっており、以前は判読も難しいような小さなキャプションを、作品からかなり離れた場所に申し訳程度に置いていた美術館でも、最近は積極的に解説を付けるようになっています。ただ、解説というものは極力客観的な情報の提供に努めるようにしても、どうしても書き手の主観がそこに紛れ込み、作品を眺める鑑賞者の主観とぶつかって問題を引き起こすことがなきにしもあらずです。

以前、名古屋市美術館の所蔵品のみによって構成される展覧会を開催したことがありました。コレクションから精選した90点を、「人物」「風景」「静物」という３つの主題によって分類・紹介するという、内容としては極めてオーソドックスなものだったのですが、90点全てについて400字程度の解説をつけました。しかもあえて客観的な事実の羅列を避け、書き手の解釈を前面に押し出した踏み込んだ内容にすることを意図しました。そのような主観的な解説が、時に鑑賞者の自由な作品解釈を妨げ、限定された一つの方向に誘導しかねないという危険を十分に承知の上で、あえてそうしました。作品の表面ではなく、深く内部にまで入り込んでもらうためには、賛同、反発のいずれにしても、鑑賞者と作品との関係に揺さぶりをかける言葉による手がかりが必要だという考えに基づいた判断でした。とはいっても一方で予防策も講じており、会場の入口には、解説はあくまでも一つの解釈に過ぎず、また美術の解釈は数学の問題のように明確な答えとして導き出されるわけでもないことを説明し、作品世界をより深く楽しむための踏み台として解説を利用してもらいたい旨を記しました。来館者の感想はおおむね好評。今までに無い踏み込んだ解説が新鮮で面白かったとの反応が多くあった一方で、予想通りというか、このような主観的な解釈を押し付けようとする傲慢な態度は許しがたいという強烈な反発も一部ありました。いずれにしても解説パネルに対してこれだけ手ごたえを感じたことはそれまで無く、踏み込んだ決断をした甲斐があったと大いに勇気付けられました。いずれ、第二弾をご披露したいと思っています。（F）

感想ノートから

はじめての美術
絵本原画の世界2013

2013年６月15日(土)～７月21日(日)

今回の感想ノートは、「楽しかった」「懐かしかった」という言葉でいっぱいでした。この展覧会は名古屋市内の公立美術館で開催されるはじめての絵本原画展でしたが、予想以上に多くのお客様にお出でいただきました。絵本原画の展覧会が開かれることは珍しいことではなくなってきていますが、原画の取り扱いにはこれからまだ整理されるべき問題がありますので、まずは皆様に原画への興味や関心を持っていただきたいと考えてこの展覧会を実施しました。公立美術館の所蔵品となっている絵本原画を公立美術館で紹介する原画展であることから、美術表現としての絵本原画の魅力に触れていただくことを一番目の企画の意図としていましたが、そのような意図を超越した皆様の絵本に寄せる篤い思いにメディアとしての絵本が持つ力の凄さをあらためて知らされました。

残された感想から理解できるのは、目の前にある原画を楽しむだけでなく、絵本を読み聞かせていたときや読んでもらっていたときのことを思い出し、そのことに多くの方が心を動かされていることです。絵本は、生活の場に入り込むことができ、そのために強く親しい結びつきを見る人とのあいだに築くことができます。絵本原画は、絵本の制作に必要な構成物のひとつであって、絵本そのものとは違います。それでも絵本原画は、そのような結びつきに支えられて、見る人の一人ひとりに体験に根ざした深い感慨をもたらしています。

絵本原画に文化財としての価値を認め、美術館などの施設が収蔵保管をはじめたのは最近のことです。アニメのセル画や漫画の原画への認識も変わりつつありますが、これらの扱いはまだ過渡期にあると言えます。感想には、百貨店などで行われる催しと比較し、子どもへの配慮より作品保護が優先されている、子どもと作品とどちらが大切なのかというご意見がありました。もとより人と作品を天秤にかけることはできませんが、文化財になるというのは、当代のみならず可能なかぎり末永く元の姿かたちを保って残されるべきものになったということです。私たちは過去の遺産を享受していますが、同じように未来の人々を慮らなくてはなりません。目の前にいる人に未来の人を重ねながら、何をどのように残すかを考えあわせつつ、見せることにも思案をしています。保存と公開という古くて新しい課題についてもあらためて考える感想をいただいた展覧会でした。（み。）

展覧会 現在進行形

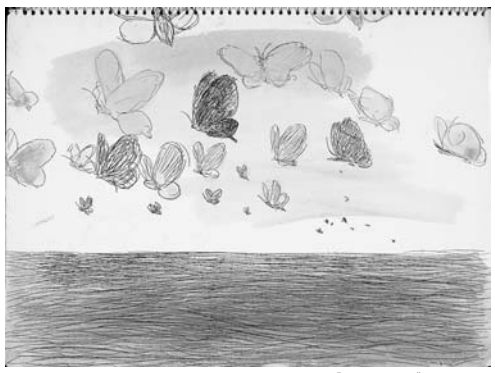
「親子で楽しむアートの世界 遠まわりの旅」展

2014年２月15日(土)～３月30日(日)

この展覧会のテーマは、私たちの「人生の旅」です。人生は新しい命の誕生に始まり、素晴らしい出会いや別れ、愉しいこと、苦しいことなど様々な出来事によって彩られ、いつかは死ぬという避けられない宿命とともにあります。また、生きているという日常の中では、死に向き合うことで生がより輝かしいものに感じられたり、遠回りだと思われることが実は結果に結びつく近道であったりと、様々な逆説にも満ちています。時になかなか出口の見えない人生の迷路の中で挫折を味わい、苦しみの中で自分自身を見つめ、視点を変えて突破口を見つけ、人間として成長していくことも人生の重要な意味でしょう。まるで迷路の中をさまようような私たちの一生は、旅と重ねあわされることもしばしばあります。今回、作品を通じてそういった私たちの人生を見つめたいと考えています。

具体的な内容としては、名古屋市美術館の所蔵品を中心に人生の旅にまつわる作品を紹介することに加え、会場内にアーチストユニットD.D.による、私たちの人生の旅を象徴するような巨大な体験型の作品を設置する予定です。D.D.の作品は、出品作品へのオマージュになっていて、展示作品と関連したD.D.の作品を体験することで、よりアートの世界を楽しんで頂きたいと考えています。

親子で一緒に体験して頂きたいということから、子どもが成長しいつか独立していくための「イニシエーション（通過儀礼）としての旅」というイメージから出発しているのですが、「人生の旅」というテーマなので、親子でというだけではなく、誰か大切な人と一緒に経験することで絆を深める旅や、未知の世界へ飛び込む一人旅で、自分自身を見つめ直し、自分の新たな可能性を見つける旅といったことにもイメージは広がります。それぞれの「人生の旅」を考えることに結び付けられるといいなあと思っています。ぜひみなさん、見に、そして体験しに来てください！（hina）



三岸好太郎　筆彩素描集《蝶と貝殻》1934年

郷土の作家たち

猪飼　重明（いかい　しげあき／1914－1992）

1914年に名古屋市に生まれた猪飼重明は、アメリカとフランスで絵画を学んだ安藤邦衛（1899－1971）が名古屋に開いた画塾に学び、そこで白木正一（1912－1995）や吉川三伸（1911－1985）らの後に同じく福沢絵画研究所に学び、美術文化協会で活動する作家たちと出会う。1933年頃に上京し、独立美術研究所に学び、1937年から日本のシュルレアリスム（超現実主義）を牽引した福沢一郎（1898－1992）が前年に開設した福沢絵画研究所で学びはじめる。1937年８月の夏期講習会では真鍋（金子）英雄（1914－1986）と共に講習会委員を務めた。また1937年には下郷羊雄（1907－1981）らが中心となった「ナゴヤアバンガルドクラブ」の結成に参加している。1939年に福沢一郎が独立美術協会を脱会し美術文化協会を結成すると、翌年の第１回より美術文化協会展に出品をつづける。1940年には名古屋でも美術文化協会展が開かれ、そこに出品しているほか、浜松で開かれた美術文化協会の講習会に参加している。舞台美術や似顔絵描きの仕事で生計を立てていたが、1945年に舞台美術の仕事で浜松に転居し、同地で終戦を迎える。以後は浜松で制作をつづけ、同地を代表する画家として活躍した。晩年は、1964年に木喰研究会を発足させ、木喰仏の全国調査を行って、1980年に『木喰仏のすべて－全国作品調査編』（誠文図書株式会社）を木喰研究会会長として刊行した。1980年には美術文化協会関東地域代表となっている。1992年に浜松市で死去する。

名古屋はシュルレアリスムが盛んな土地であり、猪飼重明は下郷羊雄や白木正一、吉川三伸、岡田徹（1914－2007）、眞島建三（1916－1994）、米倉壽仁（1905－1994）などと同様にこの地域に縁のある主要なシュルレアリスム作家のひとりである。猪飼の戦前の作品も他のシュルレアリスム作家と同様に失われているが、戦後10年ほどの間に制作された美術文化協会展出品の６作品がご遺族からの寄贈により平成24（2012）年度に名古屋市美術館の所蔵作品となった。（み。）

猪飼重明《シャベルについて》1945年　名古屋市美術館蔵

林　雲鳳（はやし　うんぽう／1899－1989）

岐阜県土岐郡笠原村（現笠原町）で製陶業を営む一家の末子として生まれる（本名：雄一）。多治見尋常高等小学校を卒業して親類や絵付業者の手伝いをし、日曜日には中京画壇の重鎮・森村宜稲が主宰する稲香画塾に通って日本画を勉強する。1920（大正９）年、名古屋に移住し、陶器製作会社の上絵付けのデザインに従事する。1922～23（大正11～12）年頃会社が解散したのを機に、森村宜稲の内弟子となった。土佐派の流れを汲む大和絵の大家であった師の影響で、専ら歴史画を描くようになる。1928（昭和３）年に上京し、師の紹介で松岡映丘の門下に入る。1932（昭和７）年の第11回帝展で《海の浄土》が初めて入選し、翌年以降の帝展（のち新文展）にも10回連続で入選する。戦後は郷里・笠原町に戻って日本画の制作と古典の研究を続ける傍ら、多治見市窯跡調査委員や名古屋市豊清二公顕彰館の資料調査委員などを務め、地域文化の振興に貢献した。1989（平成元）年６月５日死去。

名古屋市美術館は《聞香》（大正時代、東海美術協会展金賞）、《玄上》（1929年、日本美術協会展入選）、《松の下露図》（1934年、第15回帝展入選）の３点を所蔵している。《聞香》は、宜稲の内弟子となり画家として歩み始めた頃の作品で、大正末期まで続いた美人画ブームの只中で、自分の力量を示そうとした意欲作であろう。束髪で薄紅色の振袖を纏った当世風の娘は手に香炉を持ち、宴に興じる女性たちが描かれた古風な屏風の前に座っている。娘の振袖の柄は、屏風の中の女性のそれと呼応している。近世初期は女性が垂髪から結髪へと移行する過渡期であり、鹿子絞りの模様を大胆に配した小袖がよく着用された。時代考証を入念に行う雲鳳は当然こうした事実も熟知の上で、この娘の容姿をひき立てるにふさわしい時代の風俗描写を、正しく画面に採り入れたのだろう。香道盛んな名古屋の土地柄をも意識させる美人画の秀作である。（nori）

林雲鳳《聞香》大正時代 名古屋市美術館蔵

どこがおもしろい？!

今回取り上げる作品は芥川紗織（1924－1966）の《神話より》（1957年）です。

芥川紗織《神話より》1957年

「人が神話にひきずられていくように見えました。神話に影響されて巻き込まれた人のように感じました。かたくて強そうな絵だと思います。」（あかりさん、13歳）

「殺伐として鋭気な印象です。楽から苦へ落ちようとしている。苦から楽へはい上がろうとしている。炎から水が助けようとしている。水を炎が覆いかぶせようとしている。見る人のその時の心象で救われようとしているのか、落ちようとしているのか、受け取り方がいろいろあるでしょう。ある意味その時の心の鏡かもしれませんね。」（Ken Sawadaさん、42歳）

「この絵からは、いあつ感？みたいなものを感じました。あと、いかつい感じ。絵全体がトゲトゲしていてビシッと気がひきしまる感じもありました。」（李彩さん、14歳）

「私には走っているというより、吸い込まれているような感じがしました。ほぼ真ん中に向かってすべての線が集まっているので、自然と目がそっちへ行き、自分も引き寄せられている感じもします。《神話より》というタイトルだったので、本来ならありえない世界へと連れて行ってくれるのもありかな、と思います。」（モアイさん、14歳）

「遅刻ギリギリの校門での攻防に見える。上の人物が何としてでも授業に出席したい女学生。青いトゲトゲは制服のスカート。下の人は押しつぶされる生活指導の先生。」（いわせさん、22歳）

「第一印象は『人間がはっている』です。苦しそうにもがいている、動きを感じました。線や、左の青い部分から迫力が伝わってきます。《神話より》とあるので、その話の内容を知ってからもう一度この作品を見てみたいです。」（匿名）

「少しざんこくに見えた。やみにすわれていくようなようす。人のようで人ではない。」（ミニーさん、11歳）

「紙や布のこよりで作られた貼り絵のようです。心の中に巣喰う不安な鬼神のように見えます。見ているうちにグラグラと画面の中に吸い込まれるような感じがしました。」（かずさん、59歳）

「色が濃くて暑苦しい絵だと思いました。人が火であぶられ焼かれているみたいでおそろしくキモチわるいですっ!! 不思議なカンジの絵です。（人の）ひめいがきこえてきそうでゾッとします。」（ウサコさん、12歳）

「おどろおどろしい怖い感じがして線も執拗にしゃっしゃ、しゃっしゃとなって気分的に追い込まれる苦しい感じになりますが、とはいえなんかちょっとマンガちっくなキャラクターにも見えます。上の人のニヤリとしている感じとか、下の人のなぐられて（？）たおれてる人にもみえるし。けっこうユーモラスな作品なのかな、とも感じました。」（まめさん、28歳）

「染めてあるとはびっくり。」（匿名）

「太い線と細い線のバランスがいいなーと思った。」（匿名）

「熱いものと、瞬間冷凍されたものが混じりあってあふれ出てくる感じがしました。時代の痛みを神話という大きな枠組みの中でとらえようとするファイティングスピリットに感動！」（あたり前田のクラッカーさん、28歳）

芥川紗織は1950年代を中心に活躍した前衛の女性作家であり、染色で制作を行った点でも非常にユニークな存在です。神話や民話などを画題に取り上げたのは、1955年の秋に東京で開催された「メキシコ美術展」におけるメキシコ近代美術との出会い、そして愛読していた『日本民族伝説全集』の影響によるものと言われています。伝説の中から気に入った題材を選び、登場人物や場面を文章のまま再現するのではなく自分なりに解釈して大胆に展開させています。それぞれの作品がどの話のどの場面か全てを特定するのは難しいですが、とりわけ神話では誕生の場面や、男神と女神との関係に関心を持っていたようです。《神話より》では、ほぼ中央から放射状に広がる太く鋭い線の集積が画面に動きと奥行きを与えており、オレンジや黄色などの明るく鮮やかな色彩が強いエネルギーを感じさせます。（3）

イベントレビュー

今年も開催「まるっと1日わくわくアート2013」

今年も「名古屋まつり」の10月20日は、常設展を無料開放しました。

あいにくの雨で英傑行列などが中止になる中でしたが、約1500名のお客様にお越しいただき、とても賑やかな１日でした。

毎年たくさんのお客様がいらっしゃるということで、今年も当館ボランティアによる企画をご用意。メニューは、「１点トーク」「建物ガイド」「アートカードで遊ぼう」「わくわくアートQ＆A」「テレフォン・ブースの展示」の５本立て、盛り沢山です。

私も早速「１点トーク」に参加してみました。当館では、ボランティアによるギャラリートークは毎日行っています。いつもは少人数のお客様を相手に話をしているボランティアも、今回は大勢のお客様を目の前に少し緊張した様子･･･でも少したつといつものとおり優しい笑顔でお客様との対話が進んでいきます。いつもは一人で楽しむ作品も、みんなで語り合うことで、また違った作品の魅力を感じていただけたのではないでしょうか。その他にも「建物ガイド」や「アートカード」などを覗いてみましたが、どれも小さな子どもから大人まで、それぞれとても楽しそうでした。ボランティアのメンバーも、みなさんが笑顔で参加されているのを見て、今後の活動への励みになったと思います。私も改めてボランティアと共に頑張っていかなければという気持ちになりました。

誰でも気軽に楽しめるアート体験を通じて、美術をより身近に感じてもらえるようこれからも頑張っていきます。ぜひまた美術館へ足をお運びください。（MI）

イベントガイド

■ハイレッド・センター：「直接行動」の軌跡展

今回の展覧会は、ハイレッド・センターの結成50周年を記念して、その活動を記録した文献資料や記録写真を中心に、彼らの同時期の作品を加えて、ハイレッド・センターの「直接行動」の軌跡を総合的に紹介します。

会期：11月９日㈯～12月23日（月・祝）

料金：一般1,000円・高大生700円
　　小中生400円

■親子で楽しむアートの世界　遠まわりの旅　展

「親子や家族で楽しむアート」をキーワードに、美術に親しみやすく作品の持つ魅力を幅広く伝えることを目的として、名古屋市美術館のコレクションを中心に作品を紹介します。この展覧会は、人生を見つめ、人生を旅することをテーマに構成をしています。アーチスト・ユニットD.D.による人生の旅を象徴する迷路のような作品も体験することができます。いつもとは一味違う美術館で、人生の旅を大切な人と楽しんでください。

会期：２月15日㈯～３月30日㈰

料金：一般800円・高大生600円・小中生無料

■常設企画展

○特集Ⅱ 没後100年記念　ホセ・ガダルーペ・ポサダ展

名古屋市美術館のポサダ・コレクションから厳選した作品を紹介します。

会期：11月２日㈯～12月23日（月・祝）

○特集Ⅲ 独立と革命：メキシコ現代版画展

平成23年度にメキシコ政府より名古屋市美術館に寄贈された版画集の中から約40点の作品を紹介します。

会期：１月４日㈯～３月30日㈰

■コレクション解析学

※2F講堂・無料・先着180名

○第４回

日時：12月８日㈰午後２時～

演題：「作品で語る足跡」

講師：清家三智（名古屋市美術館学芸員）

作品：村井正誠《私の履歴書》1979年

○第５回

日時：２月９日㈰午後２時～

演題：「彫刻家たちの1920年代」

講師：保崎裕徳（名古屋市美術館学芸員）

作品：オシップ・ザツキン《扇を持つ女》1923年

休館日は月曜（祝休日の場合は翌日）、12月25日㈬～１月３日㈮です。詳しくはHPhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。（MI）

展評 2013年9月7日㈯～10月14日(月･祝)
松坂屋美術館

知られざるミュシャ展
―故国モラヴィアと栄光のパリ―

この展覧会は、アルフォンス・ミュシャの故郷であるチェコのイヴァンチッツェ近郊に在住する医師ズデニェク・チマル博士のコレクションを中心に構成され、さらに、ブルノ博物館ーイヴァンチッツェ博物館、ロシツェ城、そして、個人のコレクションからも出品されたものです。

第1章から第6章まで時代を追って展示されていますが、まず、第1章においてミュシャの初期の作品が見られるのは興味深いことでした。第2章から第4章までの展示では、パリ時代のミュシャの作品を堪能できます。よく知られている女優サラ・ベルナールのポスターをはじめとし、華やかでロマンティックなアール･ヌーヴォーの雰囲気や当時のベル･エポックのパリの香りを楽しむことができました。

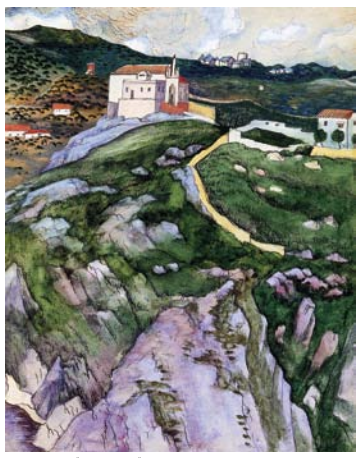
しかし、ここまでならば、しばしば開催されているミュシャ展とさして変わりはないかもしれません。この展覧会で特に面白いなと思ったのは、第5章、第6章でした。第5章には「スラヴ民族の精神」、第6章には「国家と人類愛のために」というタイトルが付されています。晩年、ミュシャはパリを離れて祖国チェコに戻り、それまでに描いていた商業主義的な作品ではなく、祖国や人類のための作品を描こうと思うに至ります。この人生の転換が、画風にもかなり現れているように思いました。パリでアール・ヌーヴォーの香りのする作品を描いていた頃には、そこに登場する美しい女性たちは装飾の一部のようでもありました。彼女たちはどちらかというと表情に乏しいのですが、ポスターを中心とする商業的な制作物の中では、そこが広く受け入れられたのでしょう。しかし、晩年の作品は、描かれた人物の心情がストレートに伝わってくるものです。いわば魂のなかったミュシャの人物像に、魂が宿ったともいえる変貌が見受けられます。ミュシャは、パリで持て囃されはしましたが、実はそこを越えて、追求したいものがあったのだと思います。そのようなミュシャ晩年の作品に出会うことができたことは収穫でした。(akko)

《女性の肖像》1923年頃

展評 2013年10月26日㈯～12月8日㈰
稲沢市荻須記念美術館

日本画家が描いた西洋風景
―滞欧作を中心として―展

洋画家が描いた西洋風景はありふれているけれど、日本画家が描いた西洋風景というのは珍しいので、何か面白い作品が見られるかもしれないと期待して訪れたが、「意外に」と言うべきか、あるいは「予想通り」と言うべきか、実際に制作された作品はあまり多くはないようである。洋画家の場合には、黒田清輝を先駆として、東京美術学校西洋画科を卒業後、パリに留学して、名立たる美術学校に通いながら、パリ画壇の流行を吸収して帰国するというのが理想的な画家への道であったので、当然のことながら滞在期間も長くなり、滞欧作の風景画も数多く制作された。それに対して、日本画家がパリに留学することはほとんど考えられない(誰に日本画を学ぶというのか？)ので、日本画家のなかでも西洋美術に関心を抱いた数少ない画家たちだけが、新しい日本画の表現を開拓することを希求して、ヨーロッパに渡ったのである。そのなかでも京都の国画創作協会の画家たち(土田麦僊、野長瀬晩花、小野竹喬、吹田草牧)が、年次展を休会してまで、1921年から1923年にかけて、ヨーロッパに滞在したのが最も大きな成果を残した(帰国後の画風展開において)と言えるが、それでも日本画材の問題と旅先という制作環境のためか、残念ながら、完成された滞欧期(滞欧後を含めても)の西洋風景を描いた風景画は決して多くはない。展覧会場を巡りながら、このようなことをあらためて「確認」したのであるが、こんな理屈は別にして、小野竹喬の小さな風景画が面白かった。《セーヌ河畔》《ボルゲーゼの庭》《ポンテ・ヴェッキオ》《エスコリアル遠望Ⅰ》《丘上廃寺》など、ペン画に淡彩を施したスケッチであるが、クロスハッチの陰影法などの表現としては洋画(手彩色の銅版画)のようでありながら、そこに描かれている風景は、あくまでも日本画家の眼で見た西洋風景であり、見ているうちに、池大雅・与謝蕪村の《十便十宜図》のような日本画の味わいを感じたのである。(sy)


小野竹喬《丘上廃寺》1922年　笠岡市立竹喬美術館蔵

※尚、本展は、笠岡市立竹喬美術館に巡回(12月4日―2014年1月26日)する。

BOOK

『股間若衆―男の裸は芸術か―』

木下直之著、新潮社、2012年

まさかここで会うとは! 何かというと、昭和59(1984)年まで名古屋駅前のロータリーにあった青年裸像のこと。野々村一男作《青年像》で、昭和33(1958)年の設置。今は、名城公園にあります。これが、ここでご紹介する『股間若衆―男の裸は芸術か―』に出てきました。

私が作者と作品の名前を知ったのは学芸員になってからですが、生まれる前からあったあの作品は、ものごころの付く頃から不思議なもののひとつでした。駅舎を背にして東を向くと、広告塔の球形回転型ネオンサインとビル名のサインを屋上に頂く「大名古屋ビルヂング」と足元に《青年像》が見えましたが、駅前ではこのふたつが奇妙で仕方ありませんでした。

著者は、いっとき流行ったものの今では忘れられたかあまり意識されなくなったものに目を向け、それらを通して近代日本の文化について考える著述をものしてきました。『股間若衆』では、男性の裸体が芸術としてどのように表現されてきたかを明治以降の歴史の流れに即して解き明かし、そこに潜む問題をウィットとユーモアを交えつつ軽やかに掬い取っています。ニッチでありながら大切な論点を含んだ課題を見逃さず、気骨と批判をさらりと滲ませながら重く硬くせずにさばいていく著者の姿勢と手法は、いつもながら流石です。

《青年像》が駅前から消えた少し後の頃、公共空間に設置された女性の裸体彫刻はセクシャルハラスメントだと議論になりました。あのとき男のものはどうなんだとひとりごちていた私には、本書はとても為になりました。初出が「芸術新潮」の新旧「股間若衆」もですが、書き下ろしの「股間漏洩集」には教えられました。(み。)

展評 2013年7月3日㈬～9月16日(月･祝)
国立新美術館

『アンドレアス・グルスキー展』

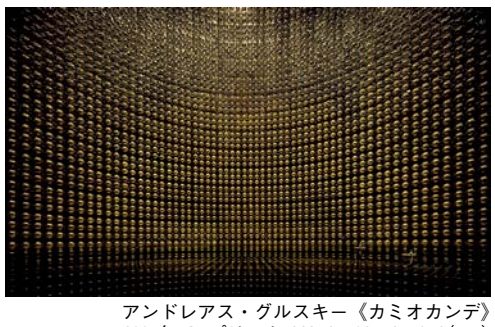
1990年前後だったか、パノラマ写真が撮影できる“使い捨て”カメラが登場し、一時期ちょっとしたブームになった。見晴らしが利く風景や横一列に並んだ集合写真はもとより、ロー・アングルで人物を「たて位置」に収めると、脚が長く写り、誰もが八頭身になれた。そうした機能は、今日では「スマホ」に引き継がれているようだが、その後、超高層のタワーの崩落や出現、さらには大震災による廃墟の光景を、メディアを通じて繰り返し体験してきた我々にとって、パノラマの光景がもたらす“スペクタクル”の効果は、単なる「視覚の欲求」に留まるものではなくなってしまった。

今年2013年、現代写真にスペクタクルを復活させたドイツの写真家アンドレアス・グルスキー(1955―　)の展覧会が東京で開催された。展示された写真作品は、ほとんどが縦横2メートルから5メートルにも及ぶ巨大なものである。制作にあたって彼は、対象を見渡すことができる位置を決め、大型カメラで撮影した後、その細部をデジタル加工によって調整する。周知の通り、レンズを通して得られた像は、焦点を離れるに従い、その描写性は弱まる、つまり「ボケ」る。グルスキーは、細部の描写性を上げながら、全体を構成する。その結果、現実ではあり得ない遠近や多くの焦点を持つ不思議な光景が現出することになる。

例えば、岐阜県飛騨にあるニュートリノ検出装置「スーパー・カミオカンデ」に取材した作品では、修理のために水が抜かれた巨大なタンクの内側を撮影し、その後、水面とボートに乗った作業員を画面に挿入している。完成した作品からは、臨場感とともに荘厳さやどこかメルヘンすら感じさせる。その他、何万人もの群衆が熱狂するマドンナのコンサートや、砂漠につくられたF1サーキットのコース、さらには平壌のマスゲーム等、細部描写と全体構成によって成立する彼の作品は、絵画が模索・獲得してきた抽象的な「構図」を見せながら、我々をとり巻く現代の社会や科学、さらには環境をも観る者に知らしめる。

そうした彼の作品は、2011年のオークションに於いて、写真としては史上最高の430万ドル超で落札され、今日では世界のVIPや「セレブ」にコレクションされていると言う。因みに、自身のコンサートを撮影した作品を所蔵するマドンナは、知る人ぞ知る写真コレクターで、グルスキー以外にもティナ・モドッティの多数のヴィンテージ・プリントを所蔵しているそうだ。(J.T.)

※同展覧会は、2月に大阪に巡回、国立国際美術館で開催されます。(2014.2.1―5.11)


アンドレアス・グルスキー《カミオカンデ》
2007年 C-プリント 228.2×367.2×6.2(cm)
©ANDREAS GURSKY / JASPAR, 2013/14 Courtesy SPRÜTH MAGERS BERLIN LONDON

CULTURE, MOVIE,DRAMA&MUSIC

人形浄瑠璃 文楽
平成二十五年十月地方公演
「生写朝顔話(しょうつしあさがおばなし)」

10月3日㈭名古屋市芸術創造センター

今年の春に実施した「上村松園展」の後期(5月14日～6月2日)に、《深雪の図》という作品が展示されていましたが、ご記憶の方はいらっしゃるでしょうか。ここに描かれている娘・深雪は、人形浄瑠璃「生写朝顔話」に登場するヒロインなのですが、今秋の文楽の地方公演でこの演目が名古屋で上演されると聞き、これは願っても無い機会ということで見て参りました。

「生写朝顔話」は、家老・秋月弓之助の娘・深雪が、宇治の蛍狩で一目惚れした大内家の武士・宮城阿曽次郎との再会を願うもなかなか果たせず、ついに家出して行方を追う旅に出たが、災厄ばかりが振りかかる…というお話です。松園が描いた深雪は、阿曽次郎に出会ってからさほど時間が経っていない頃の姿で、阿曽次郎かたみの扇を身に添えて、会えない辛さを嘆いているところでした。こんなに可憐でしおらしかった娘が、その後どんなに哀れな姿になるか、この絵から想像できるでしょうか。家を出て放浪の末、深雪は島田の宿で偶然阿曽次郎と再会を果たすのですが、その時の深雪は継ぎ接ぎの着物をまとっており、旅の道中目を泣き潰したために、白杖をついてやってきます。盲目の深雪は、間近に阿曽次郎が居るにもかかわらず、それとわかりません。訳あって素性を明かすことができない阿曽次郎は、深雪に琴を所望します。そこで哀しくも唄われるのが「朝顔の歌」、かつて宇治川の出会いの場で、阿曽次郎が扇に書きつけ深雪に与えた唱歌でした。《深雪の図》の背景にある琴は、将来の哀しい再会を観者に仄めかすアイテムなのです。

人形が琴を弾く場面や、扇を船に投げ入れる場面など、深雪の嘆きっぷりの他にも見どころの多い演目で、私のような文楽初心者でも十分に楽しめるものでした。また、今回の公演に関しては、13段目「笑い薬の段」での豊竹咲太夫の語りが圧巻でした。笑い薬を飲まされた悪役が、ひたすら笑い転げて苦しむという、シリアスな話の中にあってちょっと小休止という場面なのですが、咲太夫のアドリブや渾身の笑いっぷりに会場がどっと沸き、一番の盛り上がりを見せていました。(nori)

上村松園《深雪の図》(部分)
吉野石膏株式会社蔵(天童市美術館寄託)

【編集後記】

夏が長く続いたこともあってか、今年は台風の襲来や大雨が多かったですね。そんな中、勤続10年目にして初めて台風に伴う警報発令による非常配備の任を受け、ひとりで職場に一晩泊まる経験をしました(注：警備員は交代で常駐)。美術館に泊まるなんて面白そう！なんてとんでもない。仕事とはいえ終業時間15分前に突然宿直を命じられた方はたまりません。食料！コンタクトレンズ！メイク道具！寝場所！一瞬のうちにパニックです。実際には必要なものをコンビニで調達し、眼鏡に切り替え、建物への浸水がないか、屋外作品に被害がないかを見回る程度で大したハプニングもなく済みましたが…翌朝任を解かれ、家に帰った途端ドッと疲れが出て泥のように眠ったのは安心したからでしょうか。11月に入ってからフィリピンでは台風30号による甚大な被害が出ました。国の内外を問わず、多くの方が一日も早く落ち着いた生活を取り戻せるよう祈らずにはいられません。(3)

アートペーパー第94号 発行日：2013年12月1日
発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅・矢場町駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間：午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで
Nagoya City Art Museum